

中学校の国語の授業が 変わる!!! —その3—

これまで「単元を貫く言語活動」を位置付けることの大切さを述べてきました。教材の読解に終わらず、同じ作者の作品や同じテーマの作品を読んで紹介する言語活動を第三次に位置付けるなどです。

しかし、1単元の指導時数が少ない中学校では、教材を離れて新たな作品にふれる時間を確保するのは現実的になかなか難しいようです。

そこで、「教材を離れずに言語活動を位置付けた授業」の具体例を紹介します。

教材を離れずに言語活動を位置付ける

- 1 単元名 きずなを読む「字のない葉書」
- 2 単元で身に付けたい力
 - (1) 言動を描いた表現に着目して読み、心情をとらえる力
 - (2) 登場人物に対する筆者の思いに対して、自分の考えを明らかにする力
- 3 単元で身に付けたい力を身に付けるための言語活動
 - ◎ 娘の立場から書かれた文章を、父の立場から書き換える（リライトする）。
- 4 単元の指導計画（総時数 3時間）

時	おもな学習内容
1	<ul style="list-style-type: none">・ 「リライト」について知り、全文を通読する。・ 父に対する私の思いを、「日常の言動」と「手紙の中の姿」の両面から読み取る。
2	<ul style="list-style-type: none">・ 妹の疎開から帰郷までの間の父の思いを想像し、妹の行動と父の思いをメモする。
3	<ul style="list-style-type: none">・ メモをもとにP. 110 Q. 15～P. 111 Q. 4を父の立場から書き換える（リライトする）。・ リライトしたものをグループで発表し合って、娘が見ていた父の思いについて意見を交換する。

【原文（私の立場から）】

妹が帰ってくる日、私と弟は家庭菜園のかぼちゃを全部収穫した。小さいのに手をつけるとしめる父も、この日は何も言わなかった。私と弟は、ひと抱えもある大物からてのひらに載るうらなりまで、二十数個のかぼちゃを一行に客間に並べた。これぐらいしか妹を喜ばせる方法がなかったのだ。

夜遅く、出窓で見張っていた弟が、

「帰ってきたよ！」

と叫んだ。茶の間に座っていた父は、はだしで表へ飛び出した。防火用水桶の前で、やせた妹の肩を抱き、声を上げて泣いた。私は父が、大人の男が声を立てて泣くのを初めて見た。



【リライトしたもの（父の立場から）】

リライトのポイント

- ① 未熟のかぼちゃを収穫した姿を見た父の思いを明らかにする。
- ② 「帰ってきたよ！」の声を聞いた父の思いを明らかにする。
- ③ 妹の肩を抱いたときの父の思いを明らかにする。

末娘が帰ってくる日、邦子と息子は家庭菜園のかぼちゃを全部収穫した。いつもなら小さいのに手をつけるとしかっていたのだが、この日は何も言えなかった。二人はひと抱えもある大物からてのひらに載るうらなりまで、二十数個のかぼちゃを一行に客間に並べた。妹を喜ばせるために精一杯の、そして唯一の方法だったのだろう。

夜遅く、出窓で見張っていた息子が、

「帰ってきたよ！」

と叫ぶ声に、私は茶の間から思わずはだしで表へ飛び出していった。三月ぶりを見る末娘はやせおとろえ、疎開の日のはしゃいでいた姿とは別人だった。私はやせたその肩をそっと抱いた。骨張った小さな肩からは、この三月の寂しさ、ひもじさ、悲しさ、そして生きたいと願うわずかな力が伝わってきた。私は泣いた。声を上げて泣いた。三月の間、父として何もしてやれなかったくやしさに泣いた。

私が家族に見せた初めての涙だった。

※ この「リライト」の実践は、
『「言語活動の充実」実践事例集』
（福島県教育委員会 2010.3.2）
をもとに作成したものです。

